

系統以上の文化があり、大口盆地の周辺においては早期末乃至前期の時代に至って、これらの文化が融合して白坂、手向山の如き特殊な文様構成を持つ押型文土器が発生したものではないかと推考する。

又人吉盆地方面に多く発見されている同心円などの特殊押型文土器を伴出する平底の押型文土器も、前記の永山、松木原などの押型文土器よりも後出の南九州方面にのみ残存したと考えられる前期の時代の押型文土器であろうと想像する。

九州地方の縄文土器文化の編年の研究は近年ようやく緒についたところであり、今後の調査研究によって幾多の新事実が判明することは当然であり、今日ここに今日までの資料によって種々推測することは甚だ無謀なことと考えるが、しかし今後全く逆の結果となり総てを訂正することになろうとも、今日の一応の私の考えを御紹介することも決して無意義なことではないと考え、駄文を弄した次第である。

尚、河口氏に執筆を御約束して後、何かと種々多忙のため、他地域の押型文土器について詳細を記す余裕がなかったことは甚だ遺憾に思うところであり、今後機会を得て改めて執筆したいと思っている。

昭和 28 年 9 月 13 日 稿了

南九州における縄文式文化の研究

岩崎及び木ケ暮遺蹟について

河 口 貞 徳

肝属郡田代村岩崎遺跡と、鹿児島市田上町木ケ暮遺跡とは、共に貝殻条痕を有し、篋画きの沈線文を施した土器を出土し、相互に連繋ある遺跡と思われるので、その関係を追求したい。

一 岩崎遺跡

1 発掘状況

昭和 25 年 12 月、根占町の依頼によって、同町の千束遺跡を発掘したついでに、同月 5 日より 9 日に至る 5 日間、田代村出身の池水寛治君と共に、前に調査した岩崎遺跡を発掘したのである。田代中学校教諭 小牧重夫氏、田代高等学校教諭 相羽賢氏及び同校生徒諸君の多大な援助を得たことを記して、感謝の意を表する。

遺跡は肝属半島の略中心、大根占海岸より 10 km、標高 240 m、雄川の支流、麓川がつくった盆地に属する。この地塊は肝属平野によって孤立し、地質も主として花崗岩よりなる特

殊の地域で、高原性を帯び、平地が少しもない。

麓川に沿って、岩崎部落があり、その北東の天神社裏の傾斜地の作道を挟む畑地帯が遺物包含地をなしている。(遺物包含地の傾斜角度は北より南へ10度である。)

この遺跡地の中、作道より南側にある小園氏の所有畑地を、幅2.6m、長さ4mの試掘を行ない、更にこの試掘溝を北へ6m延長した。この略南北のトレンチと直角に、凸字形に、西へ幅2m、長さ4mのトレンチを掘り、始めの試掘箇所を第1区、延長部を第2区、凸出部を第3区と名づけた。(第一図)

表土は20cm乃至30cmあり、黒褐色の腐植土層をなしている。表土層の下部には黄色の砂礫層がある。之は花崗岩の風化したものである。この層は非常に深く、下限をきわめることが出来なかったが、遺物はこの層の上部約1mの幅に包含している。(第二図上図参照)

第2区の北側半分は表層下に砂礫層が見られず、黄色土層となっている。(第二図上図)

特殊構築堅土面

第3区より第1区へかけて、砂礫層に掘り込まれた幅40cm乃至50cmの細長い、S字状のかためられた、道路様の堅い土の面があった。西北—南東の方向に約18度の傾斜をもって下り(地表面の傾斜は13度で、堅い土面の方が傾斜が急である。)20cm乃至10cmの落差をもつ段が、50cm乃至100cmの間隔をおいて構築されている。(第一図1区3区の平面図、第二図右下の断面図参照)

この堅い土面直上に、土器破片及び、小形石斧(第一図(8)、第四図(3))が出土している。

一区においては堅面東側に、近接して2箇のピットがあり、堅土面に接して、2箇の石が段状に上下におかれてあった。(第一図参照)

又堅土面北側においては、完全土器(第一図5、第七図1)が123cmの深さに底部を上へ倒に出土した。

第二区においては、北東側に深さ72cmに山形隆起を有し、頸胴部に円形凹点を施した甕形の土器が出土した。

2 遺物

前記の小形石斧は、後述の上層土器に伴うもので、上下両端に刃を有する特殊の磨製石器である。

右の外には石器としては下層から石皿及び打われた、うすくて、するどい割れ口を有する石片が、多量に出土している。

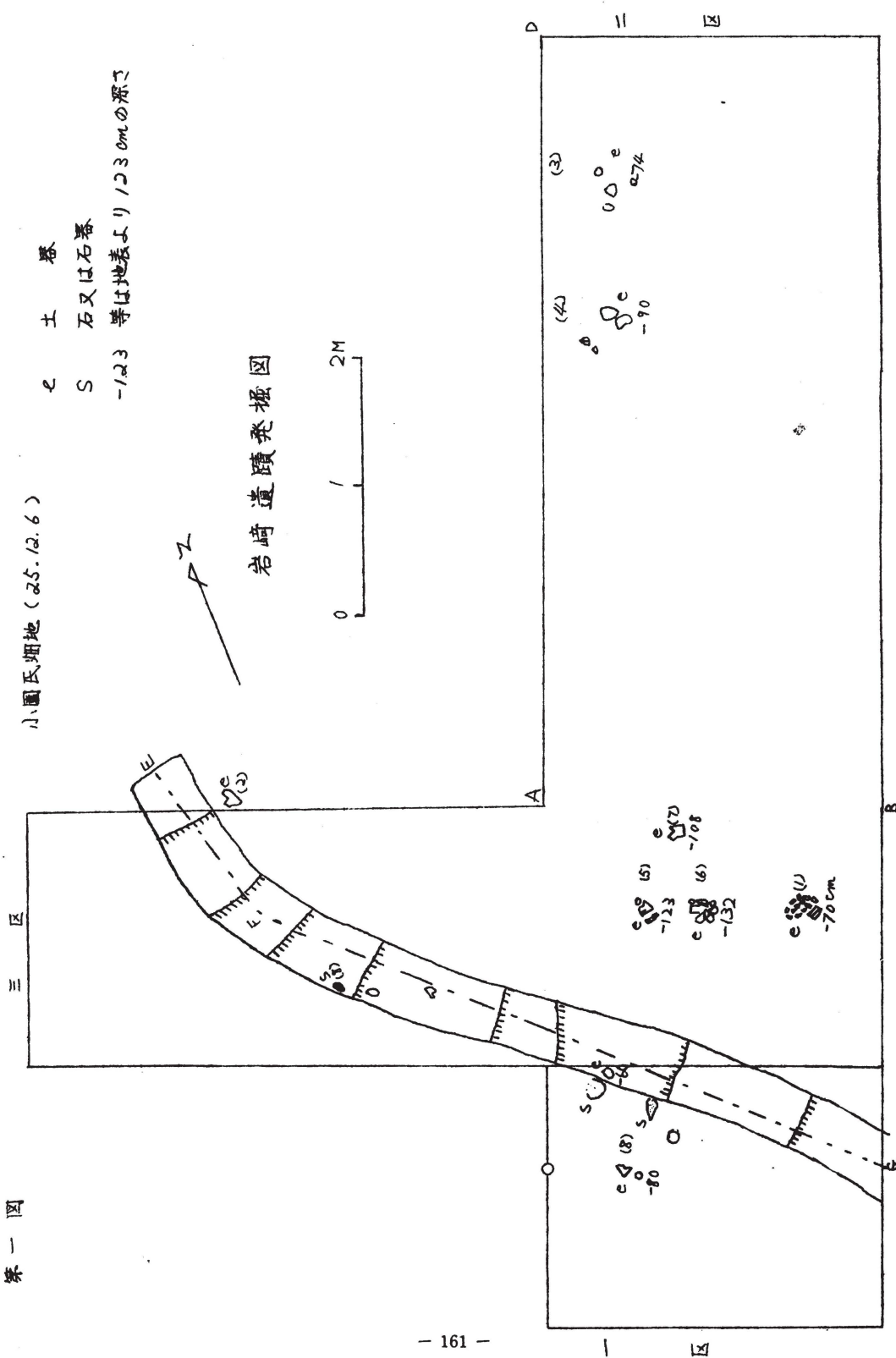
土器

この遺跡の土器は、第二層から出土するが、土器を包含する層が厚く、その中、比較的浅い上部より出土する土器と、下部深層より出土する土器とは同一系統ではあるが、差異点を有しているので、一応区別して記述し、然る後、形式上の異同について考えてみたい。

下層の土器

第一図の1m以上の深さに出土した土器である。(第一図e-100以下、第七図1、第三

第一図



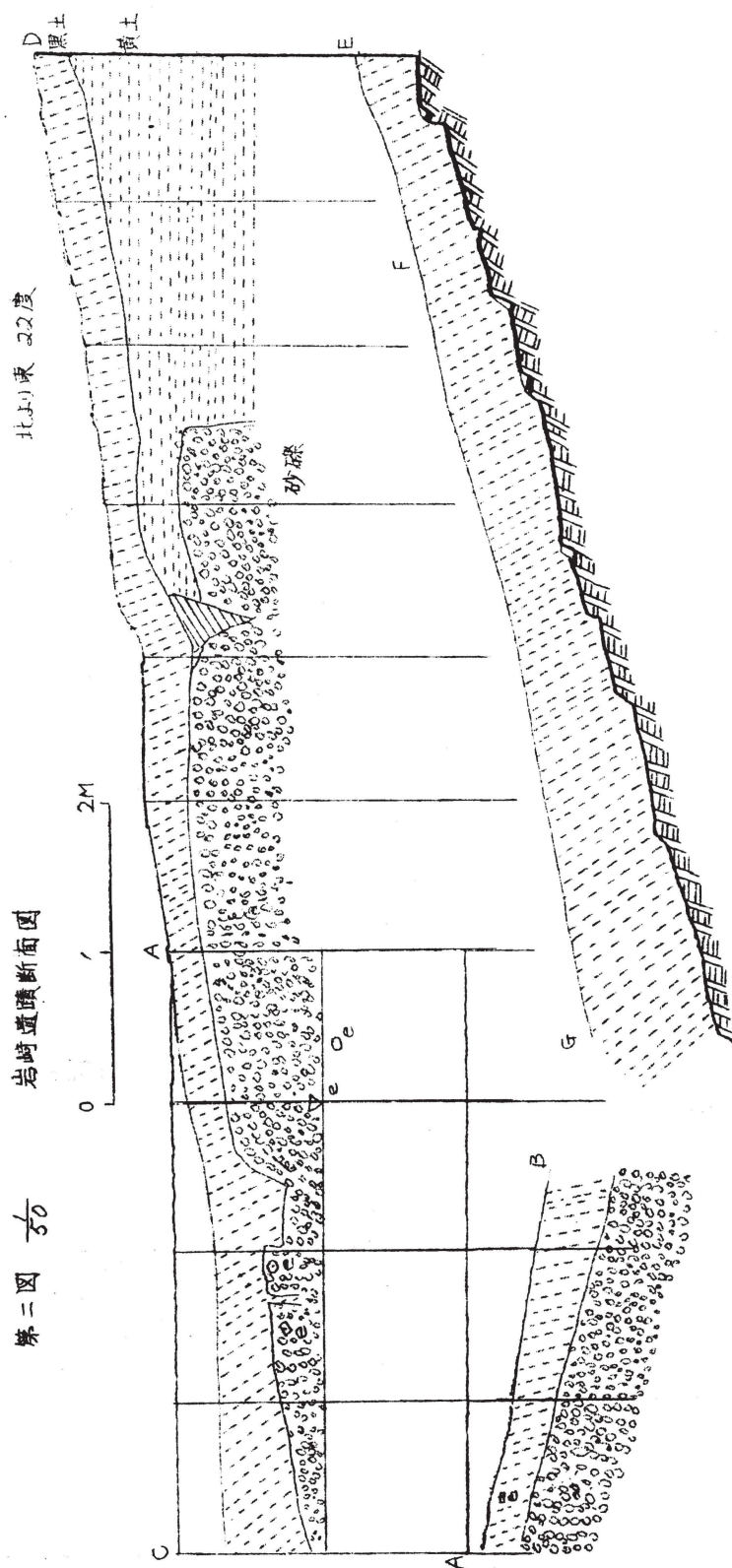


図 11 - 14)

深鉢型平底で、器壁は一体に厚い。口縁部は波状の切り込みを有し、第七図1の如き把手状の突起を有するものもある。頸部より口縁部へかけて、わずかに外反するもの（第七図1）直口のもの（第三図12）頸部より口縁部へかけて肥厚しているもの（第三図13）などがある。

黝黒色で、器面は貝殻口縁部で調整され、条痕を残すものが多い。焼成は普通で、粒子は粗く、雲母を混入している。

文様は、少々幅の広い凹曲線文であるが、口縁部の波状の切れ込みの下部に指頭で施文した様な凹文を一行、又は二行に並列し、その下部に頸部から胴部にかけて、凹曲線文を附したものである。

（第三図 11 - 14）以上の様な文様の構成から、阿高式へ近似していることが認

められる。

上層の土器

第一図の1m以内の深さより出土した土器である。(第七図2, 第三図1-5, 8-10, 第一図e-100以下)

下層土器と同様に凹曲線文を主体としている。

器形は深鉢型であるが、第七図2の如く、頸部が少々しまり胴部の少し張った甕型に近いものがある。

口縁部が平坦なもの(第三図1, 2, 4)と、波状の切込みがなく、口縁部外側の稜に、第三図3, 5, 10の土器に見る如く、斜めに、刻目を附したものとがある。

文様は第三図2の土器の如く、口縁部直下に、凹文のかわりに、貝殻口縁部によって、ひっかいた凹文を並列した土器と、第三図1, 3, 4, 5の土器の如く、凹文を失ったものとがある。

頸腹部の凹線文が、第三図3, 1, 5, 8, 10の如く、平行直線化したもの、第三図1, 2, 9の如く、平行曲線化し、特に1と9とは二平行曲線文となっているが、之等はいずれも下層の複雑な曲線文様に比較して、文様が単純である。

器面に貝殻口縁による条痕を有するものの多い点は、下層土器と同様であるが、雲母を全然混入していない点は下層土器と異なる。

小 結

以上、下層と上層の土器について記述した諸点について、比較してみると、器形は大体同様であるが、下層土器は口縁部に波状の切込みを有し、把手状の突起を有するものがあるが上層の土器は口縁部の波状の刻目を失って、平坦な口縁部となっているものが多く、又甕型に近いものを生じている。(第七図1と2の土器の器形を比較)

文様では、下層土器は、頸部に指頭瓦痕様の凹部の列を有し頸胴部の凹曲線文は、複雑であるが、上層土器は頸部凹文を失い、頸胴部の文様が平行曲線化したものが生じている。

(第七図1, 2参照)

又下層土器には、雲母を含有しているが、上層土器には雲母の含有がみられない。

以上の諸点より、両者は、同一形式と見るより、同一系統の前後に継起した二つの形式の土器と、した方が適当である。

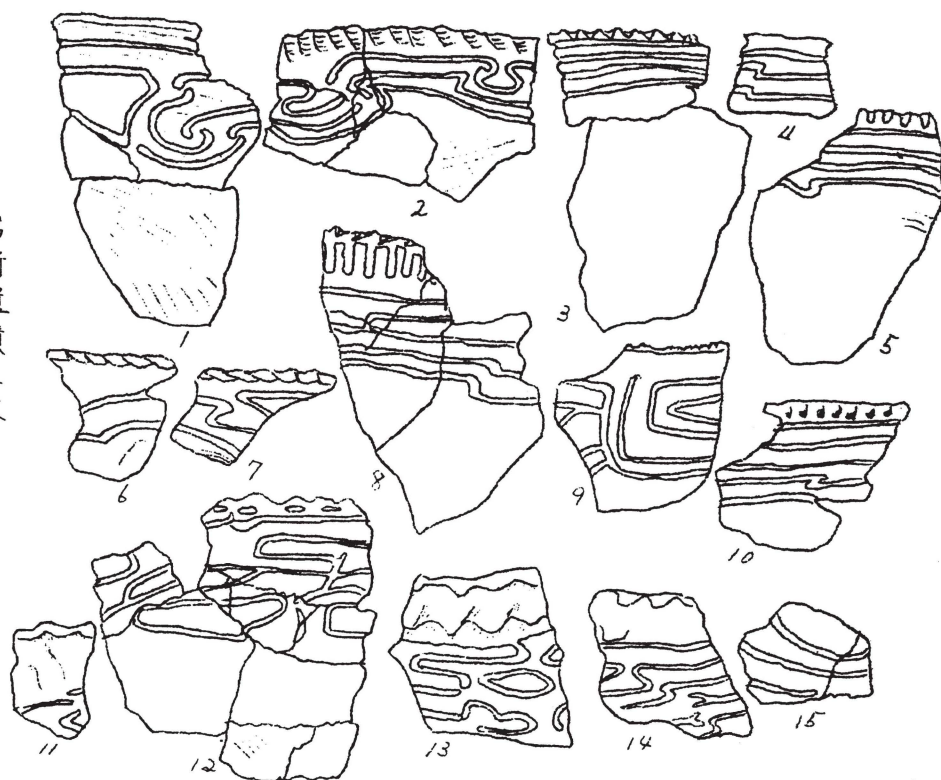
この遺跡の発掘後、同種形式の土器遺跡が、野方村、岩川町八合原、吉田村大原等、大隅薩摩の両地域にわたって、分布していることが判明し、この種遺跡は今後も相当多く発見されることが予想される。よって下層の土器を岩崎式、上層の土器を岩崎上層式と呼ぶことにする。(第一三図参照)

磨消縄文土器

第三図6, 7, 15の土器で割に薄手の土器である。口縁部が外反し、胴部の少々張った土器である。口縁上面に波状の刻みを附したものと、凹線を口縁上面に縦に施したものとがある。(第二図下図参照) 共に、口縁上面及び、上層土器と同様の凹曲線文間に、磨消手法を以

第三図

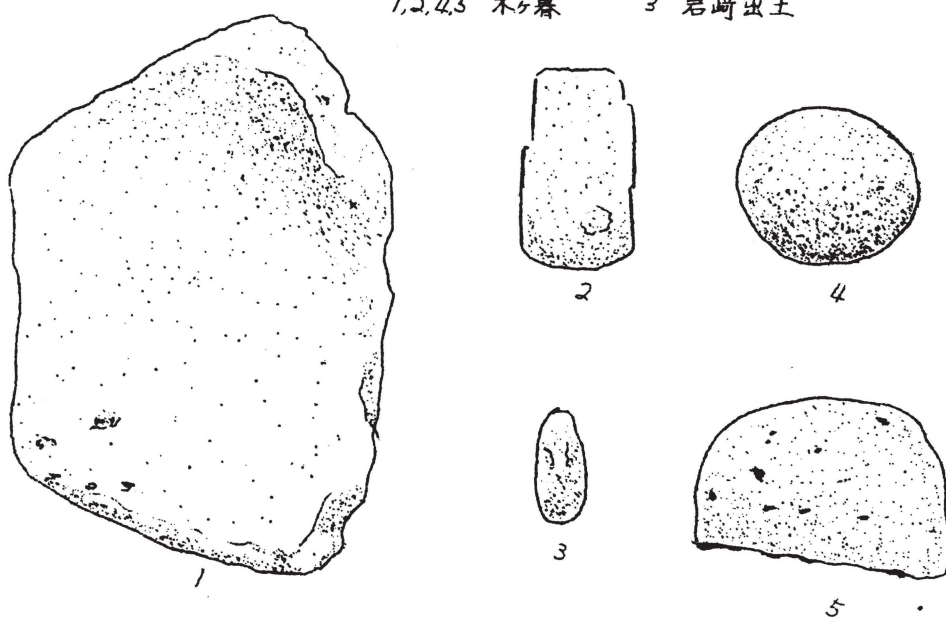
岩崎遺跡土器

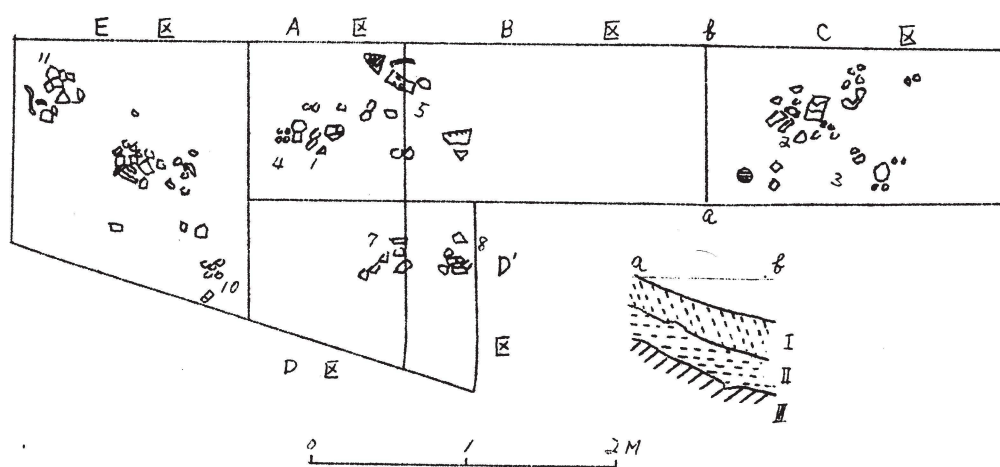
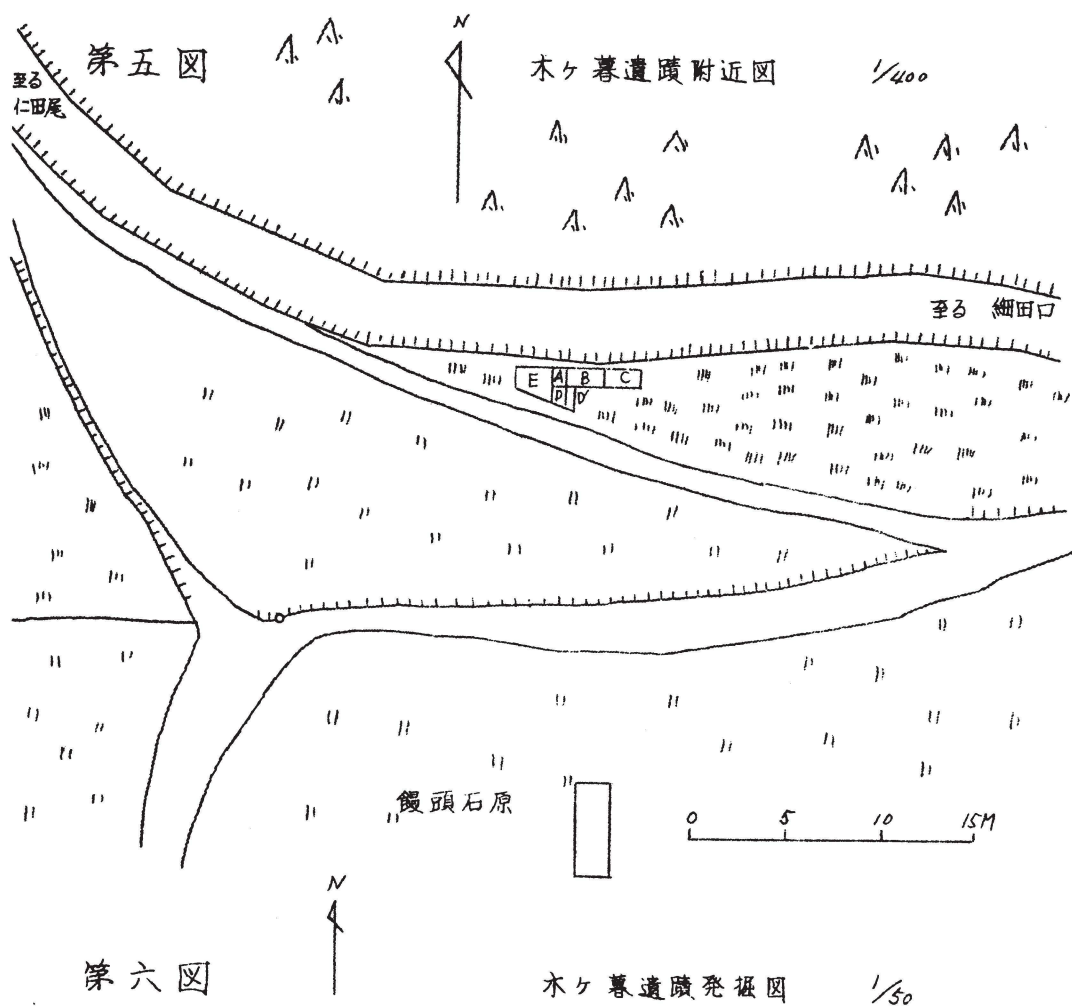


第四図

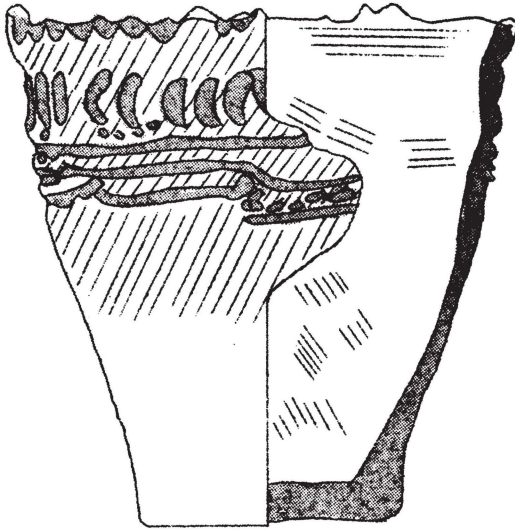
1, 2, 4, 5 木々墓

3 岩崎出土



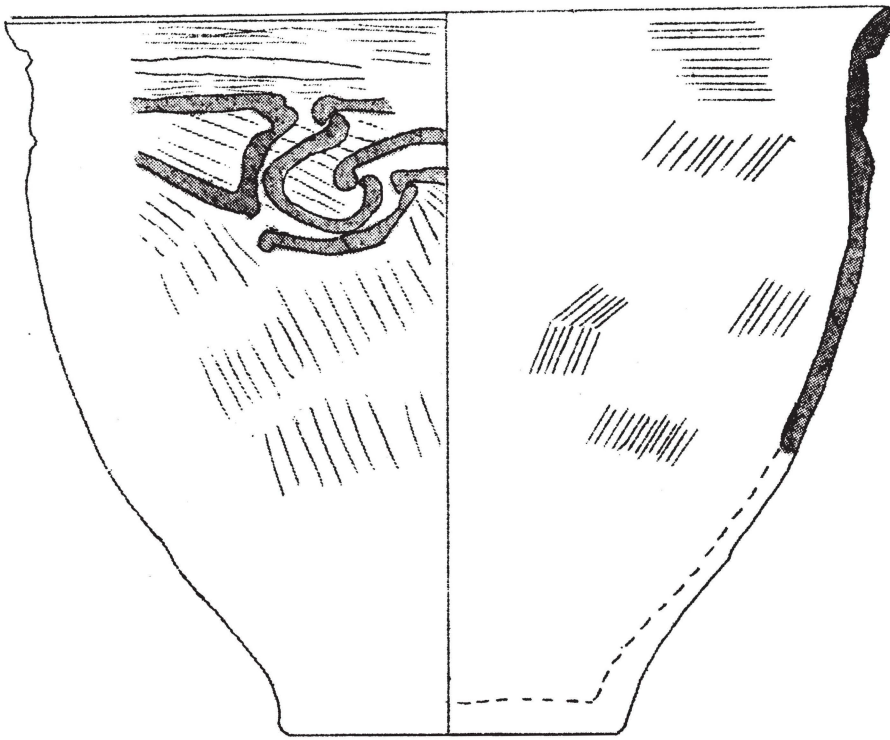


第七図



1. 岩崎下層土器

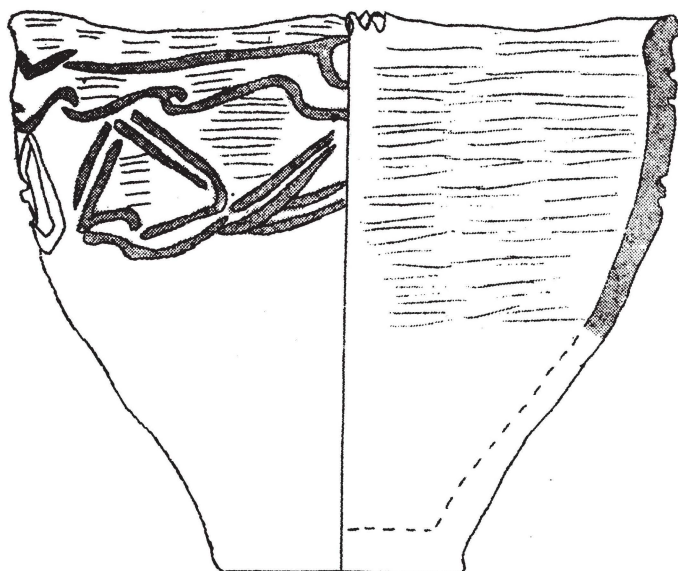
2. 岩崎上層土器



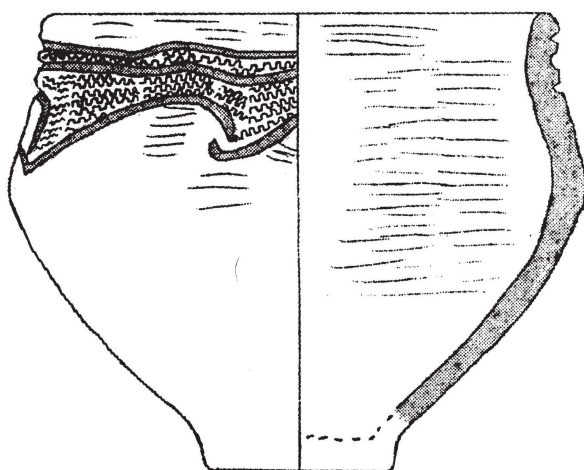
2

0 5 10M

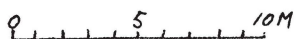
第八図



3



4



3, 4 木ヶ暮土器

て縄文を施している。

この磨消縄文土器は、上層土器と伴出関係にあると思われる。

二 木ヶ暮遺跡

1 発掘状況

薩摩半島の基部、鹿児島市の西方、金峰山脈が火山灰の低い台地をなし、西武日の谷と、上伊集院の谷がせまって、分水界をなしている饅頭石原が遺跡地である。谷山町、上伊集院村、鹿児島市が堺を接している地点にあたる。

饅頭石原の台地が、細田の谷に向かって傾斜する面に、細田口から、仁田尾に向う農道を新設した際、発見されたものである。(第五図参照)

前記の如くこの地は、鹿児島湾にのぞむ鹿児島、谷山の平地と、東支那海に望む吹上浜の平地とを結ぶ通路にあたっており、両平地から切り込まれた谷がせまって、最も台地の幅のせばめられた要路にあたる地域でもある。

昭和27年2月、上伊集院中学校教諭 中原尚文氏、松崎良博氏の案内によって遺跡を調査し、同年4月20日より23日に至る4日間、玉竜高校生、長瀬義明、村山義治の両君と発掘に従った。

前記中原、松崎両氏並びに、上伊集院中学校の援助を受けたことを記して、感謝の意を表する。

遺跡地は饅頭石原台地の北限、谷への傾斜面で雑草の生えた荒地であって、傾斜はかなり急で、平均約21度である。範囲は幅2m、長さ15m程の極くせまい地域で、上下を農道によってかぎられている。上方の台地より棄てられた遺物の集積地であろうと思われる。

第五図は遺跡地附近図であり、A-Eの地域が発掘ヶ所である。第六図は、発掘区域を示したものである。

遺跡地の地層は、表層は黒色腐植土で、26cm乃至23cmの厚みを有し、その下の黄褐色の層は、約32cmであって、遺物包含層をなす。その下部の第三層は黄色層である。

表層と第三層とはほとんど遺物を包含していない。第二層は第六図に示す如く、土器の出土量は相当豊富であった。

2 遺物

石器としては、石弾、たたき石、石皿破片を出土したのみで石斧は出土しなかった。他に北下方の谷において、農道工事の際に出土したと思われる石皿破片、石弾等を発見した。(第四図1, 2, 4, 5)又西方隣接開墾地に於て、定角式石斧を1箇を得た。(第四図2)これは両面に段を有する特殊のものであった。

土器

市来式土器

表層(第一層)に11片出土しているだけである。市来貝塚の土器を標準とするもので、

深鉢型、平底の土器で、口縁部の断面が三角形をなし、文様はこの口縁部の隆起部に施すのが普通である。

文様は貝殻、篋等による圧痕文、沈線文等を施してある。器面を貝殻縁辺を以て調整し、条痕を附しているのが特徴である。

指宿式土器

本遺跡の主体をなすもので、指宿十二町下里の下層の土器を標準とする。主に第二層より出土し、基盤をなす第三層上部にいくつこいでいるものがごく少量見られた。

黒褐色、粗鬆の土器で、器壁は普通である。器形は、第八図3,4の土器の如く、深鉢形(3)甕形(4)の二種類で、口縁部の少々外反したもの、直口のものなどがある。口縁部の平坦なもの、山形の隆起のあるものが、略同比率に存在する。(第一表参照)山形隆起部は4箇が普通であるが、3箇のものも、わずかに存する。

尚一例だけ、口縁部に釣手状の突起を有する。可成大形の土器片を含んでいた。(第十図4)

文様は、二条の平行沈線文を以て描かれ、渦状文が一つの要素となっている。(第九図、第十図参照)

(1) 小林久雄氏、及び(2) 寺師見国氏によると、指宿式は二平行曲線文として、記述されている。然るに本遺跡及び、谷山町平川遺跡においては、曲線文の外に直線文が伴出している。

本遺跡の曲線文土器と、直線文土器との比率は53対34となっている。(第一表参照)

曲線文を有する土器と、直線文を施された土器とは、器形に於ては同一である。

裏面に文様を有する事も、この形式の一特色であるが、第一表に見る如く、其数は全体の土器の15パーセントを示している。裏面に文様を有する土器は、口縁部に山型隆起を有する土器にかぎられ、隆起部の裏面に施文されている。

前述の曲線文の土器も、直線文の土器も、共に裏面に文様を有するものがあるが、器面の文様の如何にかかわらず、裏面の文様は曲線であるか、或は簡略化された点線文様であって特にここで面白いのは、直線文を有する土器の裏面の文様も曲線文様も施している点である。

(第十二図参照)

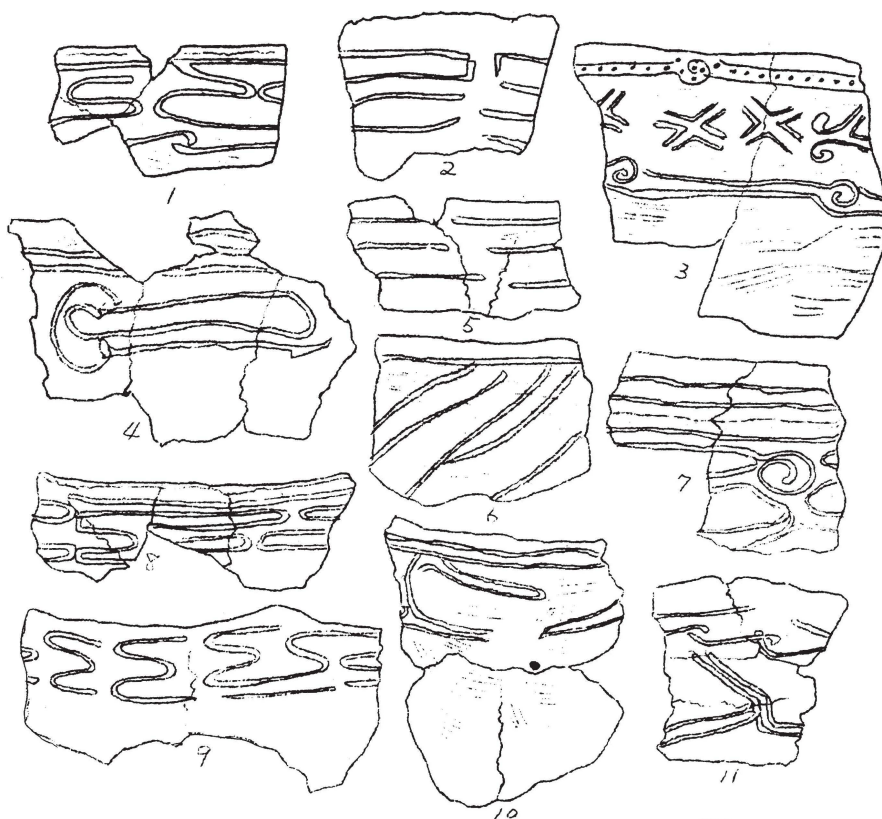
之等の土器は皆平底であるが、中30パーセントは網代底である。底部中特殊のものは、木葉の圧痕を有する土器2片である。内1個は網状の葉脈を有し、縁部は鋸歯状の刻みを有する葉の圧痕であって、「春ニレ」ではないかと思われ、他の1個は並行葉脈を有するもので「ケヤキ」ではないかと思われる。

後者と類似の底部は、28年5月、桜島武貝塚において採集しているので、木の葉を敷いて土器を製作することは、この遺跡にかぎって行われた手法ではないと思われる。

貝殻を施文具として使用することは、市来式⁽³⁾に至って盛行し器面を貝殻口辺によって調整し、条痕を残す手法が見られるが従来発見された指宿式においては、この手法は見られなかった。然るに、本遺跡及び平川遺跡の土器に於ては、貝殻口縁による圧痕文及び条痕を施

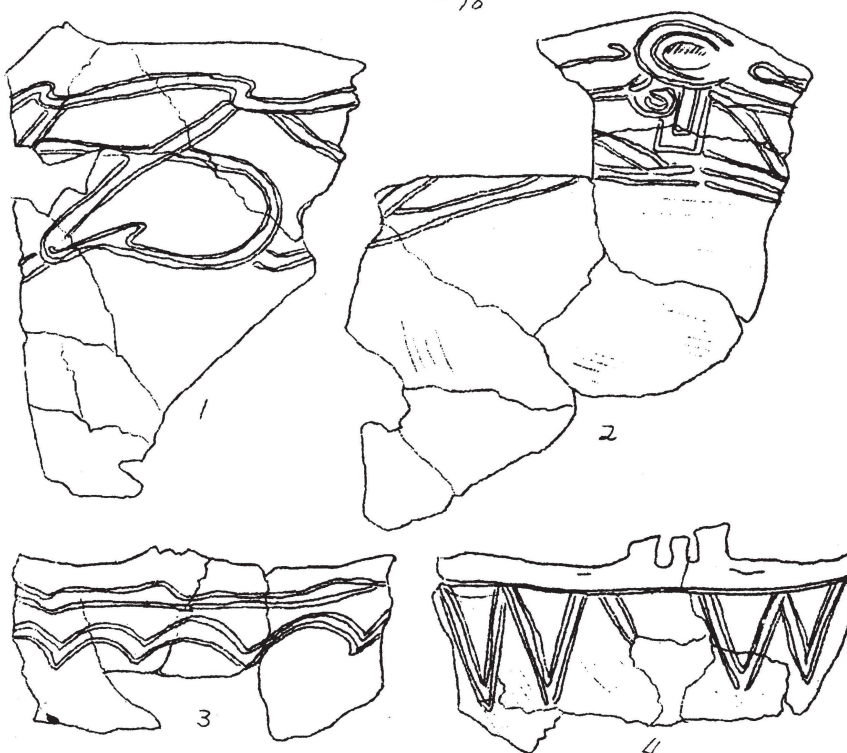
第九図

木ヶ暮遺蹟土器



第十図

木ヶ暮遺蹟土器



した土器が見られる。

本遺蹟に於ては条痕文あるものが 47 パーセントに達している。貝殻口縁による圧痕文には二種あり、その一は篋画により二条平行線文を施すかわりに、貝殻口縁の圧痕によって同様の二平行線文を施したものである。

他の種類は、篋画きの二平行線で区画された面に、圧痕を密接して施し、磨消縄文と類似の効果を表わしているもので、第八図 4 の土器はその一例である。この種の土器六個体を数えることが出来た。

無文土器

指宿式に類すると思われる無文土器 17 個体、8 パーセントである。

この他指宿式と伴出関係にあると思われる土器に、磨消縄文土器片、2 個があった。

其の他の土器

以上の土器の外に第二層から、指宿式土器と混出した少量の土器がある。

阿高式土器 1 片、出水式土器 1 片、口縁部に刻みを有し、幅の広い平行の凹線文を施した土器片 7 箇がそれである。

この内、最後の土器は、岩崎遺蹟の上層に出土する土器と同一形式のものである。

小 結

以上の木ヶ暮遺蹟についてまとめてみると次の様である。

- (1) この遺蹟は指宿式土器を主体とする遺蹟であって、少量の市来式土器と、阿高式土器等を出土するが、市来式と指宿式とは上下の関係が明瞭である。
- (2) 二条の平行線文土器に、曲線文と直線文との二種類があるが、層位的には上下関係が認められない。

文様の要素は、二者共通であり、又土器外面には直線文を施し、裏面には曲線文が施されており、器形においても両者は一致している等 二つの異なる形式の土器として分離することは不可能であり、又一者から他者が導き出される様な形式的な要素も発見されない。

以上の点より考えて、直線土器と、曲線文土器とは一形式とみることが適当であって、両者は共に指宿式と見るべきではないかと思われる。(第九図、第十図、第十一図参照)

- (3) 第十一図によって木ヶ暮遺蹟の土器の文様を見るに、雑なもの、簡単なもの等、種々の文様があるが、之等は系統的な系列をなしていることを認めることが出来る。曲線文様に於ても直線文様に於ても、共にこの系列を有することが認められる。
- (4) 貝殻口縁部による模擬縄文土器(第八図 4)は、磨消縄文土器と同様の効果を表現しようとする意図に基づくものであろう。

三 両文化層の比較

石 器

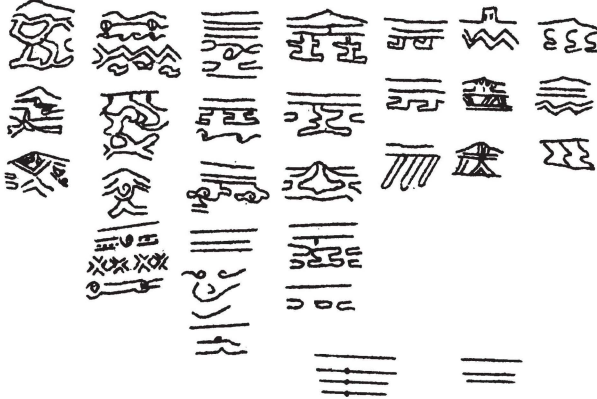
岩崎遺蹟に於ては、上層より小形石斧(第四図 3)を出土し下層より花崗岩製の石皿が出土

している。附近の同種遺蹟からは遠州式の石斧を相当量に出土しているが、之は岩崎式に伴出関係を有するものであらうと、想像される。

第十一図

岩崎と木ヶ暮遺蹟の文様の比較

木ヶ暮遺蹟土器文様



岩崎遺蹟土器文様



磨消縄文



第十二図

(内) 裏側文様



複雑 → 簡単

木ヶ暮遺蹟においては第四図1の石皿の外に、多くの石皿を出土しており、第四図4の石弾類及び椎石の類、同図5の安山岩製の楕円形の石の板などを出土している。

第四図2の石斧は遺蹟附近開墾地で得たものであるが、定角式であってこの遺蹟の土器と伴存関係にあるものと見てよい。

他の指宿式土器を出土する遺蹟より出土する。石斧及び、市来式土器の遺蹟よりも同様の定角式石斧を出土している点より見て、指宿式及び市来式には定角式石斧が伴出することが明かである。

土器

岩崎式土器(第七図1)は深鉢型土器であって、口縁部に波状の刻みを有するのが特徴であり、中には把手状の突起を有するものもある。頸部はややしまっているが、胴部が頸部より張ることがない。

岩崎上層式土器(第七図2)になると、口縁部の刻みが失われ、その痕

<木ヶ暮 指宿式>

第一表

	文 様	個 数	百分率
底 部	網 代 底	12	30%
	木ノ葉 圧 痕	2	3%
	普 通 ノ 底	49	
	計	63	

	器 形	個 数	百分率
口 縁 部	山形隆起アルモノ	83	39%
	平 坦 ナ モ ノ	79	37%
	不 明 ノ モ ノ	50	
	計	212	



第二表
木ヶ暮指宿式以外の土器

土 器 形 式	個 数
市 来 式	11
磨 消 縄 文 土 器	2
口縁ニ波状キザミアルモノ	7
阿 高 式 土 器	1
出 水 式 土 器	1
研 磨 サ レ タ 土 器	2

	文 様	個 数	百分率
口 縁 頸 部	曲線文アルモノ	114	53%
	直線文アルモノ	53	24%
	無 文 ノ モ ノ	45	
	計	212	

	文 様	個 数	百分率
口 縁 頸 部	内側ニ文様アルモノ	33	15%
	〃 ナキモノ	179	
	計	212	

	条 痕	個 数	百分率
口 縁 頸 部	条 痕 アル モ ノ	101	47%
	〃 ナキモノ	111	
	計	212	

	器 形	個 数	百分率
底 部		38	60%
		25	40%
	計	63	

蹟として、口縁部外側稜に刻みを残すものと、まったく平坦な口縁部を有するものがある。頸部がしまって、胴部に至り、やや外側へ張り出し気味の器形を呈するものが、現われてくる点に注意される。

指宿式土器と岩崎遺蹟の土器とを比較すると、第七図2と第八図3に於て見られる如く、両者はよく似ており、ただ指宿式には、山形の隆起した口縁部を有するものが、出現している点と（第八図3参照）直口で胴部の張った甕型の土器（第八図4参照）が見られる点に、差異があって、この二つの点は岩崎上層式土器に見られない器形であるが、指宿式の中にも第七図2の岩崎上層式土器とほとんど差異の認めがたい土器も存在していて、器形の上から両形式が関連を有していることが認められる。

岩崎式の文様は、頸部に指頭様のもので施文した、横に並列する凹文があり、その下に複雑な、凹曲線文が施文されているが、岩崎上層式では、指頭による凹文が失われて、曲線文のみ

第十三図

遺蹟分布図



- | | |
|------|---|
| 市来式 | 海岸底地に分布し、貝塚をつくる場合多し、指宿式と伴出する場合も相当あり、島嶋に分布 |
| 指宿式 | 市来式と伴存する場合下層に出土し、海岸に分布するが、単独の場合は山地帯で海岸から遠く離れたところに分布する。
南九州に分布が局限されている。 |
| 岩崎下層 | 田代村の諸遺蹟、野方別府前段、根占山地帯（大中原、小中原） |

となり、しかも簡単な平行曲線文となっている。

指宿式の文様は、二平行曲線文及び、直線文であるが、第七図2、岩崎上層式土器の文様によく一致している。このことは岩崎上層式より指宿式への推移を示すものといえよう。

最近岩川町八合原を、牧之瀬政雄氏、本村秀雄氏、原田正義氏等に案内していただいて、岩崎式、指宿式市来式の複合遺蹟であることを認めたのであるが、この遺蹟の発掘を行うことによって、岩崎式と指宿式との層位的関係は明瞭にし得るものと思われる。

ただ、指宿式には裏面に施文する手法を生じているが、之は岩崎式に見られぬ手法で、口縁部の山形隆起と関連して、現われた一特徴である。

以上の三形式の土器は、いずれも貝殻縁部で条痕を施す手法を有する点は、共通している。

以上に述べた諸点より、岩崎遺蹟と木ヶ暮遺蹟との文化は、相継いで起った、前後関係を有するものであって、種々の点に共通性を有し、土器の形式等から見

ると、

岩崎式 → 岩崎上層式 → 指宿式

の様な推移発展をなしたものであろう、と思われる。

註 (1) 人類学先史学講座 11 巻 綾村 A 式土器 (指宿下層式土器)

(2) 鹿児島県下の縄文式土器分類及出土遺蹟表

(3) 草野貝塚、市卒貝塚等の指宿式土器は、貝殻口縁部による条痕を有しないものである。

水俣市初野貝塚

附 九州における重弧文土器の波及について

寺 師 見 国

水俣駅に下車し国道に沿って北に行く事凡そ 1 里にして、初野部落があって、部落内の小祠、通称「ヤスノリサン」の境内に接し、其東南方の台地傾斜の畑地に、弥生式土器を出土する貝塚がある。貝塚の広さは凡そ 3,40 坪にわたる小貝塚と思われるが、私は昭和 12 年 2 月 14 日に此貝塚の 5 坪位を発掘したが其後に当時大口中学校に居られた 木村幹夫氏も之を発掘されたが同氏は間もなく香川県に転任されるに際して、同氏の発掘された遺物全部を予に寄贈されて、其報告を依託されたのであったが、其後荏苒歳月を経過し十数年後の今日まで之が報告を怠った事は実に申し訳ない事である。

最近になって漸く遺物の整理が出来たので、熊本県の貝塚ではあるが、鹿児島県に接した地であって、出水地方、伊作地方との上代に於ける文化の通路でもあり、本県とは密接な関係があると思われるので、本県考古学会に発表し、併せて同貝塚から出土する特殊形態の重弧文土器をとりあげて九州に於ける文化の流れに対して卑見を述べて大方の叱正を仰ぎたいと思う。

貝塚は其上部では畑地に露出して居るが、東方の傾斜面に行くに従い地表下に没し、貝層の厚さは凡そ 1 尺数寸の薄い混土貝層をなし下は粘土層に達して居る。而して遺物は主として、此の混土貝層の上層部と、粘土層上部の貝層下部に出土するのであるが、遺憾ながら遺物の層位的関係につきては、当時注意を怠ったために今日は等の関係は明らかでない。

遺 物

- 一 貝類、カキ、ハマグリ、ヘビガヒ其他巻貝類で凡そ十数種がある。
- 二 獣骨類 割合に少ないが、猪、鹿の骨丈けで其他の鳥獣、魚骨類は見当らない。
- 三 石 器 直径 3 寸 5 分、厚さ 1 寸 5 分の砂岩質の扁平なる凹石 1 個が出土したのみで、